

【学校教育目標】 「自分とみんなのために」心を尽くし、学びを深め、ともに動く 大小っ子の育成
【目指す児童像】 「気づく子 学ぶ子 元気な子」

玖城のほとり



大村市立大村小学校
学校だより
第8号

令和7年7月18日発行
文責：校長 堺 邦寿

★ご支援・ご協力に感謝申し上げます★

本日、無事に一学期の終業式を迎えることができました。これもひとえに、ご支援・ご協力いただきました保護者の皆様、地域の皆様のおかげと心から感謝申し上げます。1学期は、1年生は70日、2～6年生は72日ありました。この間には、歓迎遠足、運動会、水泳学習など、多くの行事があり、子どもたちは、その中でそれぞれに大きく成長しました。

明日からは、44日間の夏休みに入ります。一人一人が健康で安全な生活が送れることを願っています。子どもたちには、家庭や地域の中で、夏休みだからこそできる体験を通して、さらに心や体を鍛え、自らを成長させてほしいと思っています。宿題も、自主的な取組となるよう、各学年で指導しています。御家庭におかれましても、励ましの声かけをよろしくお願いします。2学期始業式の日（9月1日）に、元気な大小っ子と会えることを楽しみにしています。

ここで、今日の終業式の際の「児童代表の言葉」を紹介します。

一学きをふりかえって

2年 代表児童

わたしが一学きにがんばったことは、三つあります。

一つ目は、かん字のれんしゅうです。二年生になってむずかしい字がたくさん出てきました。だから、お手本を見ながら、書きじゅんに気をつけてまい日れんしゅうしました。一学きにになったかん字をしっかりとおぼえることができました。

二つ目は、そうじです。わたしのクラスは、そうじをがんばるクラスです。わたしもすみの方にあるほこりをぞうきんでふいてきれいにしました。そうじをがんばると、気持ちがすっきりしました。

三つ目は、うんどう会です。春のうんどう会になって、四月から一しょうけんめいダンスのれんしゅうをしました。本ばんは、たのしくおどれたのでこころにのこるうんどう会になりました。

二学きは、生かつのおもちゃ大会がたのしみです。たのしいおもちゃをつくって一年生がよこんでくれるようにがんばりたいと思います。

一学期にがんばったこと

4年 代表児童

わたしが一学期にがんばったことは、三つあります。

一つ目は、国語の漢字です。三年生のときのわたしは小テストのときなどに分からないところはすぐとばしたり、あまり考えずにてきとうに書いたりすることがありました。でも四年生になってからは分からないところをあまった時間にちゃんと考えられるようになりました。さらに、漢字を家でふく習したり、テスト前の休み時間を使ってテスト勉強をしたりしたので、国語のまよめのテストの漢字のところがまん点でとてもうれしかったです。

二つ目は、思いやりです。三年生までは、列でならんだときなどにクラスメイトに「お先にどうぞ。」と言われて、「うん。」といつもゆずってもらってばかりでした。でも四年生になってからは、わたしも「先にいいよ。」と言えるようになりました。また、「ありがとう」や「ごめんなさい」という言葉が言いにくかったけれど、自分から「ごめんね。」と声をかけられるようになりました。そして、お父さん、お母さん、先生、友達に「ありがとう。」と心をこめて言えるようになりました。

三つ目は、読書です。今までは、図書室や図書館にはだれかにさそわれたり、先生に「行きましょう。」と言われたりしないとあまり行っていませんでした。でも思いきって自分からたくさん本をかりに行きました。すると三年生のときは長い本を読むのがすごく苦手で短い本ばかり読んでいたけれど、たくさん本を読むうちに長い本にもちょう戦してみようという自信がつきました。そして読んでみると読み終わったあとに達成感があってなんだかうれしくなり、本のおもしろさに気づくことができました。

わたしは四年生になって、一学期は自分でも本当にがんばったと思っています。今後も、じしんをもって「がんばった。」と言えるように、できること、得意なことを少しずつつややしていきたいと思います。

～みんなちがって みんないい (その4)～

今月は「神経発達症(発達障がい)」と「特別支援教育」「合理的配慮」についてお話しさせていただきます。

「神経発達症」には様々な特性と困り感があります。例えば知的発達に遅れは無いものの、授業中「じっと座ってられない」「おしゃべりや手まげが多くなりがちで、時には教室外に出てしまう」「勝敗にこだわって、負けると癇癪を起こしたり極端にやる気をなくしたりする」「暴言や汚言、屁理屈が多く、学習を最後まで遂行できなかったり、面倒がったりしがち」「間違えたり失敗したりするとキレたりパニックになったりする」「友だちとトラブルが多く、友好的な関係が築きにくい」「コミュニケーションが取りづらい」「ボーっとしていることが多く、動作が遅かったり不器用だったりして、周りと同じ学習活動に付いていきにくい」など、極々一部の事例ですが本人も周りも困り感を抱えてしまう子がいます。

他にも「環境が変わったり、初めてのことに戸惑ったりして、慣れるまでに時間が掛かってしまう」、「計算は得意なのに、字を読むとたどたどしかったり、読めても内容が理解できていなかったりする」、「漢字の読み書きや計算、図形の理解が他の子に比べると極端に苦手で遅れが見られる」など、「人見知り」「勉強が苦手なだけ」と困り感の本質に気付かれぬまま成長してしまう事例が多くあります。

これらの子どもの中には(大人も同様です)「発達症(発達障がい)」と思われる子どもたちがいます。

このような困り感の原因は脳の機能障害に起因しますが、一見すると何も問題が無いように見えるため、「我慢が足りない」、「本人の努力不足」、「親の躾が悪い」などと誤解されがちです。この誤解が、「必要以上に厳しく躾ける」、「周りから能力を低く見られる」要因となり、「素行不良」や「精神疾患」などの2次障害に繋がることも少なくありません。

主な発達症は、SLD(限局性学習症)、ADHD(注意欠如/多動症)、自閉スペクトラム症がよく知られています。他にも「発達性協調運動症」や「選択性緘黙(場面緘黙:かんもく)」「知能が平均よりも高過ぎる高知能」など、発達症と呼ばれる症状は多くあります。

昨年もお伝えしましたが、令和4年度の文部科学省による調査では、通常学級に在籍する児童生徒で発達症の可能性を示す児童生徒が8.8%、何

らかの特別な支援が必要な児童生徒が28.7%いるとの結果が出ました。

「発達症は大人になれば治る」とか、「子どもの時だけ」ではありません。もちろん成人にも発達症の方はたくさんいます。気付いていないだけのことが多いのです。

昨年はOECD(経済協力開発機構)が2013年に行った16歳～65歳を対象とした「読解力・数学的思考力・IT活用による問題解決能力」の国際調査の結果「日本人のおよそ3分の1が読解力に問題を抱えていること」をお伝えしました。2023年の調査結果について昨年10月に公表されました。その結果を見ると「読解力」で高レベルを示した割合は23%ですので全体の4分の1、「数学的思考」で高レベル割合は25%でやはり4分の1の割合でした。苦手である、問題を抱えているレベルの割合は大きく変わりませんが、「状況の変化に応じた問題解決能力」については高レベルが10%なので、単純な計算はできるが少し複雑な応用問題にはかなり弱い、ということが分かります。

現代の教育では1人1台のパソコンが与えられたことで、様々な支援が受けられるようになりました。これにより、「読み書き」「文章理解」「書字作業等」に苦手さのある特性(SLD)は恩恵を受けられるようになりましたが、一方で「文を読んで理解し、想像を広げたり考えをまとめたり」する能力を伸ばす機会は減ってしまいます。保護者のみなさんの中にも「本は読むのではなく、アプリで聴く」という方も少なくないのではないのでしょうか？子どもたちの中には「読んでも分からないけど、聞いたら分かる」という子が多数います。「便利」＝「能力向上」に繋がるとは一概に言えません。本人が苦手なことをサポートする「合理的配慮」はとても大切ですが、成長を促しながら、少しずつサポートを減らしていけるよう配慮することも大切です。

「障がい」は三つの要素「インペアメント(欠損)・ディスアビリティ(能力不全)・ハンディキャップ(社会的不利)」から構成されていて、発達症は「ハンディキャップ(社会的不利)」であると言えます。

「特別支援教育」に対して負のイメージをお持ちの方が多いと思いますが、「理解」と「支援」により子どもの可能性は広がります。

子どもの将来をより良く変えていくためには、保護者の方々、家族、教育者、地域全体が協力し、正しく理解し支え合っていくことが大切です。